

四万十川河口でウミガメが産卵することをみなさんをご存知だろうか。以前の清流通信で紹介した“鶴”と共に長寿の生きものとされ、また童話・浦島太郎にも登場し、カメは昔から人間と深い関わりがあったことが分かる。

そんなウミガメが現在、全種が IUCN (国際自然保護連合) のレッドリストに掲載されており、保護が必要な生き物となっている。一度の産卵で 100 個以上の卵を産むウミガメだが、そのうち命を繋いでいけるのはほんの一握り。それはもちろん、自然界で生きるもの達の避けては通れない道でもあるが、地域を区切ったミクロな世界で見ると、近年においては人間に起因する部分も大きいことが分かってくる。

## ウミガメを次世代へ

四万十市付近でウミガメの保護活動を続ける溝渕幸三 (68) さん。教員時代に赴任先の近くの砂浜がたまたまウミガメの産卵場で、子ども達と一緒にウミガメの保護活動を行ったことがきっかけとなり、以来継続して取り組みを行っている。また、当時のクラスに難病を患った生徒がいて、その生徒とクラスが一丸となって保護活動に取り組んだという熱い思い出が溝渕さんのパワーにも繋がっているようだ。

溝渕さんの行う保護活動の内容は、浜辺の見回りとウミガメの来着及び産卵状況の確認、データ収集、漂着物の撤去が主となっている。保護活動といっても、直接ウミガメには手をかけず、できるだけ自然の状態を維持するべきだと考えるからである。しかし、どうしても必要な場合、例えば産卵した卵が水に流されてしまう危険がある場合などには卵を移植することもある。移植する場合も細心の注意を払い、卵への影響が少ないとされる産卵後 24 時間以内の移植を徹底したり、移植先の砂の温度管理や孵化時の子ガメのサポート等を行う。それらについても自然界に沿うことを重視しているため、先述の“浜辺の見回り”は産卵や孵化の時間に合わせて早朝から明け方にかけて行われている。

ところで、卵の移植は“必要な場合のみ”と述べたが、近年四万十川河口付近の産卵場ではその“必要な場合”が多発しているのだという。原因はいくつか考えられるが、大きなものとして砂浜から砂がなくなっていくことが挙げられる。波が砂を削り取っていくのである。そしてひどい時には砂浜が磯になってしまうこともあるようだ。雨や台風が続くこのシーズン、これだけ砂が減ってしまうとせっかく産卵しても卵が水に浸食される可能性の方が高くなる。またそもそも砂がなくなってしまうと、ウミガメが産卵できなくなってしまう。このような状況はここ数年の間に加速しているようで、産卵場から消えた砂は別の砂浜に偏って堆積するようだ。過去に一度大型機械を使って砂の移動を依頼したこともあるが、また砂が消えていくのだと教えてくれた。新設された防波堤による水流の変化が関係しているのか、原因は定かではないが、ウミガメにとって危機的な状況であることは間違いない。

ウミガメの生態については未だ解明されていないことも多いが、孵化後、約 20 年の月日を経て、成長したウミガメが自分の産まれた砂浜へ帰ってきて産卵をするという説がある。そして今年、20 年前子ども達と世話した砂浜でウミガメが産卵し、あの時の子ガメが大きくなって戻ってきてくれたのかもしれないと優しい笑顔で語ってくれた溝渕さん。保護活動の3年後に難病を患っていた生徒は亡くなってしまったが、当時の想いをウミガメが繋ぎ続けてくれている。溝渕さんにとってウミガメが安心して産卵できる場所を守っていくことは、子ども達の想いを繋ぐことでもあるのだ。



↑ウミガメの卵。ピンポン玉くらいの大きさ。



↑砂浜の岩。砂が堆積していた部分は色が明るい。



↑ウミガメが産卵した跡と海へ続く足跡。

## 知っておきたいマナー

「ウミガメが産卵した」「孵化した子ガメが海に帰る」と聞くと見に行ってみたいと思う方も多いだろう。そこで、ウミガメを脅かすことなく観察してもらうために、ウミガメの生態をまとめた。是非参考にしていきたい。

### i) 母ウミガメは驚くほど警戒心が強い

ウミガメは産卵の時期を迎えると、深夜から早朝にかけて砂浜を訪れる。そして大きな体をゆっくり這わせながら、しばらくの間、産卵に適した場を探す。しかし、その間に観察に来た人間の気配を感じ取ったり、車のライトや懐中電灯の明かり、カメラの光やシャッター音に気が付くと、ウミガメは産卵せずに海に帰ってしまうのである。まだ日の登らないような時間帯に浜辺に近づくことは避けるべきである。また、同じような理由で産卵場の近くに明るい外灯を立てたりするのもできるだけ控えたい。



### ii) 子ガメの観察にも要注意!

母ウミガメの産卵後、卵は温かい土の中で育ち、約 60 日後に孵化する。準備の整った子ガメたちは孵化後数日間は土の中で待機し、タイミングを見計らって一斉に海に向かう。小さな子ガメが一生懸命海に向かう姿は見ていてとても可愛いし、感動させられるであろう。しかし、子ガメたちにとっては生死を分ける重要な時間であることを忘れてはいけない。産卵と同じように深夜から早朝にかけて子ガメは海へと向かいだすのだが、そこにはいくつもの理由がある。一つ目は、鳥などの外敵から身を守るため。二つ目は、気温の関係。子ガメは日に当たりすぎると干からびてしまうらしい。そして三つ目は、明かりだ。子ガメは明るい方へと向かう習性があり、真夜中に明るく光る海を目指して足を運ぶのである。

つまり、母ウミガメの場合と同じように、子ガメの観察に関しても夜中に懐中電灯を持って浜辺に近づいたり、むやみに外灯を立てるのは好ましくないということである。それは子ガメを誤った方向に誘導してしまうことになり、その結果、子ガメは外敵に襲われたり、干からびたり、運よく海にたどり着けたとしても余分な体力を奪われたりということになる。

もし、産卵や子ガメが海に向かう姿を見たいと思うなら、朝日が昇ってから浜辺へ向かってみるのが良いだろう。運が良ければ、産卵を終えて海に帰る母ウミガメや、ちょっと出遅れた子ガメの姿を見ることができのかもしれない。

## 四万十川とウミガメ

では、四万十川とウミガメとを考えたとき、ウミガメのためにできることは何か。まず一番に考えられるのはゴミ問題であろう。ゴミの誤飲によるカメの死は後を絶たないし、子ガメにとってもゴミは妨げになる。四万十川で出たゴミは大水が出たときに海へと流れ、世界中を漂う。また、四万十川流域内でも様々な声上がる砂防堰堤についても、ウミガメの産卵場の砂問題と全く関係がないとは言いきれない。さらには、河口域での工事の際は、多面的な調査や検証を行ったうえで決断することが重要となる。

海と川が繋がっていることについて、抽象的ではなく具体的に捉え、丁寧に読み解いていくと、四万十川のあるべき姿がもう少し見えてくるのかもしれない。



↑ 漂着したゴミのなかにゴミが溜まる「ゴミのブラックホール」